

はじめに

日本人は辞世の歌や句を詠むことによって、「死」と「詩」を結びつきました。死に際して詩歌を詠むとは、おのれの死を単なる生物学上の死に終わらせず、形而上の死に高めようというロマンティシズムの表われなのではないでしょうか。

そして、「死」と「志」も深く結びついていました。死を意識し覚悟して、はじめて人はおのれの生きる意味を知ります。有名な坂本龍馬の「世に生を得るは事を成すにあり」こそは、死と志の関係を解き明かした言葉に他なりません。

また、「業隠」には「武士道といふは死ぬ事と見つけたり」という句があります。これは、武士道とは死の道徳であるというような単純な意味ではありません。武士としての理想の生をいかにして実現するかを追求した、生の哲学の箴言なのです。

このように、もともと日本人の精神世界において「死」と「詩」と「志」は不可分の関係にあったのです。「辞世の歌」とは、それらが一体となって紡ぎ出した偉大な人生文学であるといえるでしょう。

株式会社サンレー 代表取締役社長

佐久間 庸和